

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 10 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370883

研究課題名(和文) 総力戦体制下の日独社会政策の比較歴史社会学的研究

研究課題名(英文) Comparative Socio-Historical Study of the Japanese and German Social Policies under the Total War System

研究代表者

田野 大輔 (Tano, Daisuke)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：60330122

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1930年代半ばから40年代初めにかけての日本とドイツの総力戦体制構築の過程で、労働・余暇問題への対処を主眼とした両国の社会政策がいかなる役割を果たしたのかを、比較歴史社会学的な観点から考察しようとしたものである。とくにナチス・ドイツの余暇組織「歓喜力行団」が戦時下日本の厚生運動に与えた影響に焦点をあてることで、労働科学やテイラー主義・フォード主義といった欧米の先進的な経営管理手法を受容しつつ、余暇の積極的活用を通じて労働生産性の向上をはかったナチスの社会政策が、どんな形で戦時下日本の社会改革構想に受け継がれ、総力戦体制＝福祉国家体制の構築に寄与することになったのかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study examined, from a comparative socio-historical perspective, how the social policies of Japan and Germany from the mid-1930s to the early 1940s, which were bound to cope with labor and leisure issues, contributed to establishing the total war system of the two countries. By focusing in particular on the influence that the Nazi leisure organization "Strength through Joy" exerted on the Japanese leisure movement "Kosei Undo", it made clear in which manner the Nazi social policy, which adopted advanced management methods such as Taylorism and Fordism and increased labor productivity through utilizing leisure time, was introduced to the social reform plan of wartime Japan, contributing to the establishment of total war (welfare state) system.

研究分野：歴史社会学・ドイツ現代史

キーワード：総力戦体制 社会政策 日独関係 労働 余暇 厚生

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者はこれまで、ナチ党大会やヒトラー崇拜などを典型とする「政治の美学化」や、出産奨励からエロティシズムの擁護にいたる「性-政治」を主たる対象として、ナチズムによる「欲望の動員」のメカニズムを歴史社会的に解明する作業に従事してきた。そして、ドイツの文書館・図書館等での史料調査にもとづく研究の結果、ナチスの支配が暴力や強制によってではなく、むしろ自発的な同意によって支えられていた実態が明らかになり、その研究成果を著書『魅惑する帝国 政治の美学化とナチズム』(名古屋大学出版会、2007年)と、『愛と欲望のナチズム』(講談社選書メチエ、2012年)にまとめた。こうした研究の過程で、ナチスが広範な国民を政治的に動員するにあたって、労働者に様々な娯楽や慰安を提供することで懐柔をはかっていたこと、なかでも余暇の「喜び」によって労働者の「力」を増進しようとしたナチスの余暇組織「歓喜力行団」の活動が大きな役割を果たしたことに、関心を深めるようになった。さらに、この「歓喜力行団」の活動が当時ドイツと関係を強めつつあった日本でも注目を集め、日本厚生協会の設立をはじめとする戦時下の厚生運動の発展に決定的な影響を与えた事実も明らかになり、この問題を扱った論文を国内外で発表するなど、本格的な研究に着手することになった。

(2) 本研究に関連する国内外の研究動向については、㉞ナチスの社会政策、とくに「歓喜力行団」の活動、㉟日本の総力戦体制と厚生運動の展開、㊱日独関係、とくに文化面での交流の3点が焦点となる。㉞については、ドイツを中心に欧米には多数の研究が存在するが、近年の傾向として労働科学やテイラー主義・フォード主義の影響やそれとの共時性を強調する研究が出てきており、本研究はそうした新しい動向を国内の研究に導入する意義をもつこと、㉟については、総力戦体制論や厚生運動研究など、国内の研究の蓄積が厚いが、ナチスの社会政策の影響をドイツの史料にもとづいて考察した研究は少なく、その点に未開拓の問題が残されていること、㊱については、日独関係史を中心に近年大きな注目が集まっている分野だが、国内外ともに日独の外交関係に焦点をあてた研究が多く、文化面での交流に関する研究は手薄であることが指摘できる。本研究は以上の3点にわたる国内外の研究動向に鑑み、それぞれの領域で手薄な問題をカバーすると同時に、新たな視角から研究を進展させようとするものであり、その意味で、国内外の研究動向において先駆的な意義をもつ。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、ナチス・ドイツの余暇組織「歓喜力行団」が戦時下日本の厚生運動に与えた

影響を中心に、1930年代半ばから40年代初めにかけての両国の総力戦体制構築の過程を比較歴史社会的な観点から考察し、余暇の積極的活用を通じて労働生産性の向上をはかったナチスの社会政策が、どんな形で戦時下日本の社会改革構想に受け継がれ、総力戦体制＝福祉国家体制の構築に寄与することになったのかを明らかにしようとするものである。ナチスの「歓喜力行団」が日本の厚生運動に影響を与えた事実自体は、研究代表者のそれまでの研究によって概ね明らかになっているので、本研究では上述の国内外の研究動向に対応して、㉞ナチスの社会政策、とくに「歓喜力行団」の活動、㉟日本の総力戦体制と厚生運動の展開、㊱日独関係、とくに文化面での交流の3点に焦点をあてて、それぞれの領域で以下の具体的な課題を設定することにした。

(2) ㉞ナチスの社会政策、とくに「歓喜力行団」の活動については、余暇の「喜び」によって労働者の「力」を増進しようとしたこの組織の活動が、戦間期欧米の余暇運動の影響を受けながら独自の発展をとげた点、また労働科学・テイラー主義・フォード主義といった先進的な経営管理手法を受容しつつ労働生産性の向上をはかった点を中心に、総じて20世紀前半の国際的な潮流に棹さすものであったことを明らかにしようとした。㉟日本の総力戦体制と厚生運動の展開については、厚生運動が「歓喜力行団」を模範として急速な発展をとげた経緯、厚生運動の指導方針をめぐる対立と混乱、厚生運動が総力戦体制構築の過程で果たした役割を中心に、ドイツの影響のもとで展開した日本の社会政策のあり方を、20世紀の総力戦体制＝福祉国家体制の成立という枠組みのなかで問い直すことを試みた。㊱日独関係、とくに文化面での交流については、「歓喜力行団」を模範として厚生運動が発展をとげる過程で、日独の精神的な絆を強調する相互認識・イメージが形成され、両国の外交的な関係強化に無視できない役割を果たしたこと、にもかかわらずその相互認識・イメージは矛盾に満ち、表面的なものにとどまらざるをえなかったことを明らかにしようとした。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、ナチス・ドイツの余暇組織「歓喜力行団」が戦時下日本の厚生運動に与えた影響を中心に、1930年代半ばから40年代初めにかけての両国の総力戦体制構築の過程を比較歴史社会的な観点から考察しようとするものであるが、具体的な研究の進め方としては、㉞ドイツの文書館・図書館等で行う史料調査、㉟日本の文書館・図書館等で行う史料調査、㊱応募者の所属研究機関で行う史料分析・研究調査の3つを組み合わせながら進める方法をとった。そして、具体的な研究対象としては、㉞ナチスの社会政策、とく

に「歓喜力行団」の活動、④日本の総力戦体制と厚生運動の展開、⑤日独関係、とくに文化面での交流の3点に焦点をあてることで、最終的には、余暇の積極的活用をはかったナチスの社会政策が、どんな形で戦時下日本の総力戦体制＝福祉国家体制の構築に寄与することになったのかを明らかにすることを試みた。なお、本研究は当初平成26年～28年度の3年間を予定していたが、最終年度の史料調査が計画の半分程度しか実施できなかったため、研究期間を1年間延長し、残りの半分程度の史料調査を平成29年度に実施するにいたったことを付記しておく。

(2) ⑦ナチスの社会政策、とくに「歓喜力行団」の活動については、「歓喜力行団」とその上部組織である「ドイツ労働戦線」が発行していた機関誌や、両組織の関係者が記した文書などを幅広く渉猟するため、各年度1～2回にわたり⑧ドイツの文書館・図書館、とくにベルリンの連邦文書館と国立図書館、外務省政治文書館、ミュンヘンの現代史研究所と国立図書館などで史料調査を行った。そこで得られた史料・文献をもとに、⑨所属研究機関で研究調査を行うことで、「歓喜力行団」が戦時期欧米の余暇運動の影響を受けながら独自の発展をとげ、国際的な余暇運動の主導権を握るにいたったこと、また「歓喜力行団」を中心とするナチスの社会政策が、労働科学やテイラー主義・フォード主義といった先進的な経営管理手法を受容し、当時の国際的な潮流に棹さすものであったことを明らかにしようとした。

(3) ④日本の総力戦体制と厚生運動の展開については、厚生運動の関係者の見解を示す文書や、日本厚生協会の機関誌『厚生』、産業報国運動や健民運動、国民精神総動員運動に関する史料・文献を幅広く渉猟するため、各年度1回ほど⑩日本の文書館・図書館、とくに大阪市立大学図書館や日本体育大学図書館などで史料調査を行なった。そこで得られた史料・文献をもとに、⑨所属研究機関で研究調査を行うことで、余暇の積極的活用をめざした厚生運動が具体的な方向性を欠き、組織的な実現を見ないまま展開せざるをえなかったこと、また総力戦体制確立の急務が叫ばれるなか、厚生運動が労働統制の強化を目的とする勤労新体制建設の動きに呑み込まれ、実質的な意味を失うことになったことを明らかにしようとした。

(4) ⑤日独関係、とくに文化面での交流については、「歓喜力行団」と厚生運動の関係を中心に、日独の政治外交や文化交流に携わった関係者の見解を示す文書や、1940年の「興亜厚生大会」にいたる日独文化交流の流れ、たとえばヒトラー・ユーゲントの来日などの交流イベントに関する史料、さらには日独文化交流が進展するなかで両国の新聞・雑誌等

にあらわれた国民世論に関する史料・文献を幅広く渉猟するため、⑦⑧の史料調査と並行する形で⑪ドイツではベルリンの外務省政治文書館、連邦文書館と国立図書館、⑫日本では外務省外交史料館と国立国会図書館などで史料調査を行った。そこで得られた史料・文献をもとに、⑨所属研究機関で研究調査を行うことで、欧米の先進的な経営管理手法の流れをくむナチスの社会政策が、どんな形で戦時下日本の社会改革構想に受け継がれ、日独の相互認識・イメージの形成に寄与したのかを考察するとともに、ナチスの影響のもとで展開した日本の社会政策のあり方を、20世紀の総力戦体制＝福祉国家体制の成立という枠組みのなかで捉え直すことを試みた。

#### 4. 研究成果

(1) ⑦ナチスの社会政策、とくに「歓喜力行団」の活動については、余暇の積極的活用をはかった「歓喜力行団」を中心とするナチスの社会政策が、20世紀初頭以降の労働科学・テイラー主義・フォード主義の潮流に棹さしつつも、機械的組織論の批判と人間的要素の重視という方向に生産性向上の活路を見出そうとするものであって、生産性の向上という目的と労働者の社会的統合という目的を結びつけたという意味で、戦間期欧米の国際的な潮流との間で連続性と非連続性の両面を兼ね備えていたことを明らかにした。1936年にドイツ・ハンブルクで開催された「世界リクリエーション会議」は、それまで欧米の余暇運動をリードしてきた国際労働機関にかわって、ドイツとイタリアが主導する国際的な余暇運動の結束点となり、ナチスの「歓喜力行団」の先進性を世界にアピールする舞台にもなったが、本研究はこの会議の前後のドイツとイタリアの動向を精査することによって、そうした先進的な社会政策を導入したナチスが、1936年の「世界リクリエーション会議」の開催を契機に、余暇の拡充を通じて生産性の向上を実現するという独自の社会政策を打ち出すことで、国際的な余暇運動の主導権を握るにいたったことを明らかにした。このほか、本研究は「歓喜力行団」の初代局長であったドレスラー＝アンドレスの活動を精査することを通じて、労働者の社会統合をはかったこの組織の初期の「社会主義的」な余暇政策が体制内部の利害対立によって不十分にしか実現されなかったことも明らかにすることができた。

(2) ④日本の総力戦体制と厚生運動の展開については、日本の厚生運動がナチスの「歓喜力行団」を模範として急速な発展をとげつつも、指導方針をめぐる対立と混乱を克服できないまま、労働統制の強化を目的とする勤労新体制建設の動きに呑み込まれ、国民精神総動員運動や産業報国運動と合流する形で実質的な意味を失うことになったことを明

らかにした。日本の厚生運動は、1936年の「世界リクリエーション会議」以降、38年の日本厚生協会の設立、40年の「興亜厚生大会」の開催にまでいたるものの、戦時下という状況のもとで具体的な方向性を欠いたまま展開し、総力戦体制確立の急務が叫ばれるなか十分な組織的実現を見ることなく終わったのであった。厚生運動は、欧米の余暇運動や経営管理手法の流れをくむナチスの「歓喜力行団」から多くを受容する形で発展したが、欧米の模範は日本の伝統と軋轢を生み、その受容は様々な矛盾をはらむものであった。この点に目を向けることで、本研究は戦時下日本の総力戦体制の抱えていた矛盾や限界を提示した。これによって、20世紀前半に欧米で発展した労働科学・テイラー主義・フォード主義が日本の社会改革構想にいかなる影響を与え、厚生運動の展開を方向づけたのかという視角から、先進的な経営管理手法が総力戦体制確立の過程で果たした役割と意義を明らかにし、日本の総力戦体制＝福祉国家体制の問題に新たな知見を加えることができた。

(3) ⑦日独関係、とくに文化面での交流については、1930年代半ば以降、日独の精神的な絆を強調する相互認識・イメージが広まり、両国の外交的な関係強化に大きな役割を果たすなかで、戦時下日本の社会改革構想がナチスの先進的な社会政策に模範を見出しつつも、これを精神主義的な方向で受容しようとしたため、余暇の拡充とは真逆の一方的な労働強化をもたらすに終わったことを明らかにした。1940年に大阪で開催された「興亜厚生大会」にはナチスの幹部も招待され、日本の関係者と交流を行ったが、この大会で採択された「歓喜力行」のスローガンは、日独の社会政策面での提携を宣言するだけで、厚生問題に関する実質的な議論の深化をあらわしてはいなかった。ナチスの「歓喜力行団」は、労働力の再生産のためには職場・労働過程のみならず、職場外・余暇の生活様式の合理化もはからねばならないという科学的な労働管理思想にもとづくものであったが、そうした先進的な思想もまた、「心身鍛錬」や「君国奉公」といった精神主義的な形で受容されるにとどまり、結局のところ一方的な労働強化をもたらすに終わったのであった。本研究は、こうした余暇の重視とその反面での労働強化という逆説的な過程に焦点を当てることで、日本の総力戦体制＝福祉国家体制の問題を日独文化交流を中心とした国際関係の枠組みのなかに位置づけ、ドイツの先進的な制度がいかにして日本の社会改革構想に影響を与えることになったのかという問題を中心に、国際的な文化受容の観点から日本の戦時体制のあり方を捉え直した。

(4) 以上の研究成果を通じて、本研究は厚生

運動が総力戦体制構築の過程で果たした役割を中心に、ドイツの影響のもとで展開した日本の社会政策のあり方を、20世紀の総力戦体制＝福祉国家体制の成立という枠組みのなかで問い直すことができた。研究代表者は、これらの研究成果の一部を論文として発表した。とくに④⑦については研究の進展が遅れたこともあって、研究成果をまとめる作業を終えておらず、出版を予定していた著書を完成するにはいたっていない。これについては、継続課題として引き続き取り組み、数年以内に研究を完成させたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計3件)

田野大輔、消費が作りだす『民族共同体』 国民的社會主義者ドレスラー＝アンドレスと国民受信機・国民車計画、ゲシヒテ、有、9、2016、49-65

田野大輔、河合信晴著『政治がつむぎだす日常 東ドイツの余暇と「ふつうの人びと」』、西洋史学、無、263、2017、62-64

田野大輔、レギーナ・ミュールホイザー著『戦場の性 独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』、ジェンダー史学、無、13、2017、114-118

#### 〔学会発表〕(計2件)

Tano Daisuke, "Strength through Joy" in Japan, XVIII ISA World Congress of Sociology, 2014/7/16, Yokohama, Japan

田野大輔、消費が作りだす「民族共同体」 国民的社會主義者ドレスラー＝アンドレスと国民受信機・国民車構想、ドイツ現代史学会、2015/9/20、神戸大学国際文化学部

#### 〔図書〕(計5件)

大木毅・大澤武男・小野清美・佐藤卓己・佐藤優・芝健介・菅原出・高田博行・田野大輔・永井潤子・中島義道・永岑三千輝・原田一美・三浦耕喜・山下公子ほか、洋泉社、ヒトラーとナチス第三帝国、2014、112(22-25、56-59、70-71、80-81)

宮田眞治・畠山寛・濱中春(編集)・國重裕・桑川麻里生・小林和貴子・齊藤渉・佐藤成基・菅利恵・高田博行・武田利勝・竹峰義和・田野大輔・田村和彦・中丸禎子ほか(執筆)、ミネルヴァ書房、ドイツ文化 55 のキーワード、2015、296(108-111)

三成美保・内田雅克・長志珠絵・木村朗子・鈴木則子・高岡尚子・谷口洋幸・田野大輔・中里見博・二宮周平・野村鮎子・原ミナ汰・山崎明子、明石書店、同性愛をめぐる歴史と法 尊厳としてのセ

クシュアリティ、2015、336(292-312)  
田野大輔・柳原伸洋(編著)、ミネルヴァ  
書房、教養のドイツ現代史、2016、  
360(1-8, 133-156, 166-170)  
Sven Saaler, Kudo Akira, Tajima Nobuo  
(eds.), Fukuoka Mariko, Suzuki Naoko,  
Hakoishi Hiroshi, Kato Yoko,  
Rolf-Harald Wippich, Heinrich  
Menkhaus, Peter Pantzer, Tano Daisuke,  
Hans-Joachim Bieber, Gerhard Krebs,  
Danny Orbach, Kawakita Atsuko, Sato  
Takumi, Iwasa Takuro, Brill, Mutual  
Perceptions and Images in  
Japanese-German Relations, 1860-2010,  
2017, 437(289-312)

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

田野 大輔 (TANO, Daisuke)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：6 0 3 3 0 1 2 2